Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

農ある暮らし

6人の新規就農者ストーリー（都市近郊農業編）

＼特別インタビュー／

相原農場　**相原 成行** 氏

（神奈川県藤沢市）

はじめに

「農業」というと、何を想像しますか?

代々農家を継承してきた家族で営む農業、会社のように数十人単位で行う大規模農業、施設の中で栽培される植物工場、山奥で一人で取り組む自給自足、他の仕事から主な収入を得ながら副業として行う農業、半農半X、福祉と農業を合わせた農福連携…。

栽培一つとっても、有機栽培、自然栽培、慣行栽培…など、たくさんの栽培方法があり、生計という側面でみても、農業一本で立てている場合もあれば、他産業とのかけ合わせでの収入の場合もあります。

農業と一言にいっても、人によって想像する「農家像」も、農業の定義も多様です。

今回は、都市近郊で環境循環型農業に取り組む新規就農者6名の農業従事者の方のインタビューを載せました。
また、多くの有機農家を送り出してきた都市近郊の環境循環型農業の指導・普及を支える、相原農場の相原成行氏のインタビューも掲載しています。

「農業」という仕事のイメージをつかむのにお役に立てれば幸いです。
さあ、農業への扉を開いてみましょう!

- 市民農園を利用する
- 農家さんを手伝う
- 農業を仕事にする

- 別の仕事をしながら農業を行う(半農半X)
- 独立して農業を行う(独立就農)
- 農業組織に勤める(雇用就農)

Index

はじめに

目次

01 家族で新規就農から専業農家に [柿右衛門農園・柿田祥誉さん]

02 農業で「好き」と「経済」の両立を目指す [貴山農園・山本貴文さん]

03 自然栽培の畑を居場所に [まるほ農園・北條貴久さん]

04 農業と福祉、農福連携を形に [にこにこ農園・井上宏輝さん]

05 会社員をしながら農業を続ける [角田あおぞら農場・角田喜之さん]

06 誰もが野菜作りを楽しめる場づくりを目指して [体験農園コトモファーム・池原惇介さん]

07 相原農場 ・ 相原成行 氏「特別インタビュー」

08 神奈川県の環境循環型農業の普及と指導を支える [相原農場・相原成行さん]

09 独立就農までの流れ

10 描いてみよう!マイ農園プラン（MEMO）

終わりに

家族で新規就農から専業農家に

Interview

柿右衛門農園
柿田 祥誉さん [神奈川県藤沢市]

会社員→相原農場で研修→新規就農にて家族で専業農家
就農：8 年目
面積：畑 2 町＋田んぼ 3 反
品目：野菜（50 品目）、お米
農薬・化学肥料を使わずに栽培　自家採種 (一部)

1. 農業をはじめたきっかけ

うちの嫁さんが三浦で大豆レボリューションっていう、大豆づくりのプログラムに参加したことがきっかけですね。その時の受け入れ先農家さんが有機農家のところだったので、プログラム以外でも農作業をちょっとお手伝いしたりしたのですが、そこで食べた野菜がすごく美味しかったんですよね。だんだんと農業を仕事にしたい気持ちが大きくなりました。研修先を探す段階で、都市近郊農業で、有機農業でとなると、相原農場さんがあるというのを嫁さんからの情報で知り、援農ボランティアにいってみたら、研修生もいっぱい受け入れてるし、お客さんとも直接繋がってる営農スタイルで。自分のやりたいことと非常に近いんだなと思ったんで、相原農場にお願いすることにしました。

2. 実際、農業を仕事にしてみて

農業で個人事業主なので、自分が思った通りに自分の好きなようにやれるし、野菜が生育していく過程を全て見ることができます。びっくりするぐらい綺麗な自然の美しさを感じる時もあります。体を動かすし、新鮮な野菜がいっぱい食べれるので、健康になりました。あと、花粉症とかすごかったんですが、農業を始めて徐々に改善していきましたね。大変な肉体労働の後のビールがすごく美味しいし。心の底から、仕事にして良かったなと思います。逆に大変な点は、休みがとりずらい点や、暑い時だろうが寒い時だろうが、結構過酷な環境の中で、やらなきゃいけないことは、やらざるを得ない時もあるところですかね。収入面に関しても、最初の 2、3 年は、大変でしたね。今が 8 年目ですけど、3、4 年目からお客さんが付き始めてから、だいぶ安定してきたなって感じですね。

3. 今後について

今後の展開としては身近な農家っていうか、遊びに来れる農家みたいな感じで、どんどんうちの農園の方に来てもらえるようなイベントだったりとかいろんなことをやっていきたいなとは思ってます。

農業で「好き」と「経済」の両立を目指す

Interview

貴山農園
山本 貴文さん [神奈川県藤沢市]

会社員→相原農場で研修→新規就農にて独立農家に
就農：5 年目
面積：1 町
品目：野菜（40 品目）
農薬・化学肥料を使わずに栽培

1. 農業をはじめたきっかけ

ニュージーランドの循環型農業をやってる農園へ住み込みで働きに行ったことがあって。その僕自身も田舎で育ったので、農業ってものは結構身近にあったんですけど、全然こう魅力を感じてなくて、むしろ嫌だなと思ってたんですけど、ニュージーランドでは、いろんなものが無駄なく循環している農業っていうものを見ることで。それがすごく面白いなっていう風に思えて、そこからだんだんと農業への興味が深まっていって。その後、農業関係の法人とか勤めたりした後、相原農場で研修をした後、独立就農しました。相原さんのところでの研修を希望した理由としては、循環する農業＝有機農業で、神奈川だと有機農業で研修受けられるところは、相原さんのところしかなかったですし、30 年以上農業をやられてるので、色々、学べるものが多いんじゃないかなと思いまして。

2. 農業を仕事にしてみて

自分自身がやってて好きな仕事ができていること、まず 1 番、仕事にしてよかった点ですね。自然環境の中でいろんなものに左右されながら作るので、台風が来て全部ダメになったりとか、虫が大量発生して大変なことになったり、自分が意図しないことで失敗もたくさんあるし、その時はすごく落ち込みますけど、また 1 からスタート切れるし、全てがダメになるっていうこともないですし、自分が「農業が好き」という思いさえあれば何度でもやり直せるし、ずっと続けられるのかなっていう風に思ってますね。また、僕らみたいな新規で入る農業者っていうのは代々の農家に比べると、やっぱり勘とか経験とかが全くないので、土壌診断など、ある程度データとかも参考にしながら、自分の何が間違ってるのかとか、どうすれば良くなるかっていうのを、できる限り把握しながら、失敗が少なくなるようにやっています。経済面では、世間一般的に見ると農業っていうのは、なかなか収入が厳しいっていう印象がすごくあるかと思うんですが、やり方を工夫すれば、その中でもなんとか経済を成り立たせていく方法もあるんじゃないかと思っていて、それを実践していきたいなと思っています。農業でサラリーマン以上にちゃんと稼いでいくっていう目標を立てているのですが、毎年毎年コツコツと売上も伸ばしているので、それを継続してやってくっていう事ですね。

3. 今後についてとか、これから始めようという方へ

やりたいとか好きだっていう思いがあれば、もうどんどん始めた方がいいと思います。すぐ 1 年、あっという間に過ぎていくので、もちろん準備もたくさん大事ですけど、あんまり考えすぎるのも、スタートがなかなか切れなくなるので、やりたい気持ちがあれば農業界に飛び込むのがいいんじゃないかと思います。

自然栽培の畑を居場所に

Interview

まるほ農園
北條 貴久さん [神奈川県藤沢市]

小学校の先生→相原農場で研修→新規就農
就農：6 年目
面積：畑 5.5 反 + 田んぼ 6 畝
品目：野菜（50 品目）、お米
農薬・肥料を使わず自然栽培にて栽培

1. 農業を始めたきっかけ

もともとは小学校に勤めていました。仕事は嫌いじゃなかったんですけど、身の回りや社会だったりに対して、気にかかることや、おかしいんじゃないかって思うことが増えてきて。仕事や生き方について考えていく中で、色んな事のベースが「農」にあるんじゃないかって思って、農業を始めました。

2. 農業を仕事にしてみて

実際、農業を初めてみて、ストレスはなくなりました。経済的には全然なんだけど、食べるものを作ってるのか安心感があって。初めは、どこかに所属しているって安心感がなくなって不安だったかな。あと、農業は楽ではなくて、夏の熱い日とか、キツイなぁとか、かったるいなぁとか思うことはあります。基本的に週 7 日畑に出てるし、家のこともやってるから体的にはきついけど、精神的にはいいかな。ご飯もうまいし。夜もぐっすり眠れるし。今は 50 種類ほどの野菜を育てていて、１つの野菜で４～５種ほど、今年は大根なんて 9 種類も育てたかな。栽培は、農薬や化学肥料はいれない有機のやり方に加えて、堆肥も入れず、耕耘もしない、いわゆる自然栽培と呼ばれる方法でやってます。畑によっては、米ぬかとか油粕とか、肥料分を含んだものを入れるところもあるけど、考え方としては、肥料というよりは畑の有機物の分解を促進する微生物の餌として使ってるって感じかな。いろいろな珍しい野菜を育てていて、自然栽培をしていることもあり、自然食品店から声をかけてもらったり社会福祉法人の給食で使ってもらったり。

3. 今後について

畑を始めて 6 年目になって、生産も販売も、ペースはつかめてきました。これからは、コミュニティ作りに力を入れていきたいかな。障害持ってる子とか、不登校の子とか、そういった子たちは積極的に受け入れようと当初から思ってて、定期的に活動しています。最近でも不登校の保護者や老人施設から連絡があり、増えている印象があります。結果的には、場を作って「はい、よかったね」じゃなくて、やっぱりそこを経て、社会にうまく交われるようになったらいいなっていうのがちょっとあって。うちで力を蓄えてもらって。でも、もっというと、残りたいっていう子には、仕事を提供できる場でもありたい。そうなるとちょっと圃場広げるなり加工なりって話になっちゃうんだけど。何か仕事にもなるような形。今は NPO だったり、他の形だったり、目的に向けたやり方を模索していますね。

農業と福祉、農福連携を形に

Interview

にこにこ農園
井上 宏輝さん（写真左から二番目）[神奈川県藤沢市]

養護学校の先生→かながわ農業アカデミー→新規就農にて独立農家
就農 12 年目
面積：畑 2 町弱（梅 3 反ほど含む）
品目：野菜（100 品目）
農薬・化学肥料を使わずに栽培

1. 農業をはじめたきっかけ

就農は 2009 年だったかな。農業の前に 8 年間くらい養護学校で教員をやっていて、卒業生たちの卒業後の進路の選択肢として「農業」という仕事があるんじゃないかと思い始めて。退職後、農業アカデミーに通って、就農してから、12 年くらいになってるんじゃないかな。

2. 農業を仕事にしてみて

農業始めた時から畑に対する考え方は、あんまり変わってないかもしれないね。より、「やっぱりそうだよな」と思うことが強くなってるかな。野菜を育てながら、土を作っていく。生き物が生きやすい環境を一時的にでも作っていく感じ。気候も変わってきてるから、土に負荷をかけないやり方でやらないと、もうきついんじゃないかって思えてきた。農業やるときって、草刈ったり耕したり土を裸にするじゃん。そうなると土に紫外線も当たるし、乾燥もして、虫とか微生物とか畑で生き物が生きにくくなるし、刈った草とか堆肥とかを分解してくれなくなる。畑に草が覆っていると、適度な湿り気も保てて、植物や生き物が生きやすい環境になるし、逆に激しい雨が降っても、草が余分な水を吸い上げてくれて、畑をいいバランスにリカバリーしてくれる。

3. 今後について

名前はなんでもいいんだけど、今後やりたいことは、「にこにこ食堂」。別にさ、俺が料理つくるってわけじゃなくて、うちの農産物使って、ちょっと興味ある人が料理とか加工品作りとかやってみることができる場を作りたい。加工品作りを手伝ってくれた人がちょっと農産物持って帰れるとか、それでその場を切り盛りする軸になってくれそうな人がいれば雇用するとか。ゆるく関われるけど、雇用とかにもつながるような絶妙なバランスを考えていきたいね。仕事をする場所だってかっちりし過ぎず、ちょっとルーズなところも残す。色んな人が色んな関わり方ができる引き出しを増やすにはどうすればいいか考えることに、俺自身一番魅力を感じる。学校にいけない子とかが興味があれば畑にきて、農作業とか、販売とか、料理とか、いろんなことを学ぶみたいな。味噌作ったり、ジャム作ったりやりたいよね。入り口としては、食べたいから作る。無駄になっちゃうから保存食作る。加工品作りってそういった必然性があって、そこにちょっとした計算式があったり、塩分濃度だとか学びもある。子供も大人も、色んな人が色んな関わり方ができる場が必要だと思うよね。死ぬまでに形作りたいね。それじゃ遅いか。50 くらいまでに。

会社員をしながら農業を続ける

Interview

角田あおぞら農場
角田 喜之さん ［神奈川県秦野市］

会社員→相原農場で研修→新規就農で独立農家に→会社員と農業の半農半 X
就農：6 年目
面積：畑 4 反
品目：野菜（30 ～ 40 品目）
農薬・化学肥料を使わずに栽培

1. 農業をはじめたきっかけ

純粋に野菜づくりが好きということがずっとあって、僕が就農したのも自分で野菜を作ってみたら楽しくて、食べた野菜が美味しくて、仕事にできたら超楽しそうっていう単純な動機からでした。藤沢市の相原農場さんへ研修にいった後、独立就農しました。

2. 農業を仕事にしてみて

いま農業とは別に、会社にも勤務をしています。野菜の出荷がある火曜日は農業をしますが、基本的に、週 5 日のフルタイムという形で会社にも勤めて、畑とその会社での仕事を両立しています。ただ子どもが 3 人いるとなかなか思った通りにならなくて、感覚的には常に会社員の仕事と畑と家族の時間を天秤にかけている感じですね。畑に出る時間としては、土曜日、日曜日も、忙しい時は土日 6 時間ずつ出るって時はあるけど、平均として 2 日間合計で 7 時間とか 8 時間ってところですかね。2017 年の 2 月頃から始めて、丸 4 年やっていて今 5 年目に突入した現在、実質は 4 反くらいの面積の畑を契約していて、そのうちの使っているのが 2 反くらいになります。今の会社に就職する前にすごく悩んだんですよ。何のために農業やっているんだろうって。就職活動って方面から観ると、農業やらずに週 5 働きますって言った方がいい条件で就職できるところいっぱいありますよって転職エージェントに言われたこともありました。悩みぬいて考えてみると、お金じゃなくても続けたいって思っていて、結局好きだからやってるんだなってところにいきつきました。

3. 今後について

あとは実際就農してみると、農業をやっている人との出会いがあって、人間的にも深く知り合えるんです。畑での解放感のおかげなのか、会社とは違った人間関係を構築できる。援農に来てくれる人とか、「野菜採りたいです」とか来てくれた会社の同僚とか、全く知らない人もいたり、自分が会社員をやっていたらきっかけがない様々なご縁が畑っていう場を介して生まれたんですよね。農業はそういう人とのつながりという面でも人生を豊かにしてくれるものなんだなって思いました。将来的に子どもの成長とか、自分の仕事とかで畑を縮小したりとかはあるかもしれませんが、何かしらの形で続けていきたいなと思っています。

誰もが野菜作りを楽しめる場づくりを目指して

Interview

体験農園コトモファーム
正社員 池原 惇介さん [神奈川県藤沢市]

会社員 (製造業)→NPO 職員 (農業系)→雇用就農 (体験農園・生産)

品目：野菜（40 品目）
農薬・化学肥料を使わずに栽培

1. 農業をはじめたきっかけ

大学卒業後、食品メーカーで営業職として勤めていました。その会社は広島県に専用の自社農場を持っていて、25 歳の時にその農場で約一年半の研修を受けることになりました。土地の開墾から始まり、様々な作物の栽培、収穫した食材を使った食卓提案まで行う過程で、ものづくりの精神を一から学ぶという場でした。体力的にはきついことも多かったですが、性格的には合っていたのか、目の前の農作業に没頭しているとその日の成果が目に見えてわかり、作業を終えると清々しい気持ちになっていました。また農作業を通じて、自分たちが普段何気なく口にしている食べ物には、どれだけの時間、労力、そして作り手の思いが込められているのか、その背景を目の当たりにしました。当時の経験が、農業に興味を抱く大きなきっかけになったように感じます。研修が終了した後は元の営業職に戻りましたが、次第に今後の働き方について見つめ直す機会が増えるようになりました。農場にいた時の自分自身の心境を何度も思い返して、農業に携わる仕事、中でも多くの人と農業との接点を増やすような仕事がしたいという思いを漠然と持つようになりました。そんな時に自分が思い描いた仕事に重なる部分が多いと感じ、縁あってお世話になることになりました。

2. 実際、農業を仕事にしてみて

農業系の NPO に関わった後、えと菜園という小さな農業系の会社に就職しました。えと菜園は、農作物の生産・体験農園・通販の 3 つの事業に取り組むことで「農を食と職に」を目指す会社です。現在は体験農園コトモファームのスタッフとして、ご来園されるお客様が気持ちよく野菜づくりを楽しむことが出来るよう、全般的なサポート業務を担当しています。野菜栽培の知識や技術的な引き出しを増やしていけるよう、日々勉強中といった感じです。自分の五感を使った方が記憶に残りやすいと思いますし、何より畑に出るのはとても楽しいので、なるべく時間を作って農園の様子を見て回るよう心掛けています。コトモファームを初めて訪れたときに、農園全体を案内してもらったのですが、畑を見た時のことを今でもよく覚えています。夏場ということもあって雑草が生え放題で、野菜がその中で埋もれているような状態でしたが、雑草や土の中の昆虫、微生物が一緒になって、皆が力を合わせて野菜を育てているのだと教えてもらいました。どの畑を見てもお客様によって育てている野菜はバラバラです。畑ごとの個性や多様性が肯定されているような気がして、今ではとても好きな所になっています。

3. 今後について

私自身もそうだったように、コトモファームで野菜づくりをされているお客様は、様々なきっかけから野菜づくりに興味を持たれたと思います。野菜作りを楽しんでいただき、畑に来るとあっという間に時間が経つような、関わってくださっている方々にとっていつまでも心に残る場になればいいなと思います。

Interview

特別インタビュー

相原農場

相原 成行さん

藤沢市の代々続く野菜農家。現在は５代目。
化学肥料、農薬には一切頼らず、お米、多品目の野菜を栽培している。
肥料も、地域で調達できる有機物を中心とし、植木剪定枝と米糠を混ぜて発酵させた自家製堆肥や、米糠を混ぜて発酵させた自家製発酵肥料を活用し、草も緑肥としてとらえ、栽培に活用している。

神奈川県の環境循環型農業の普及と指導を支える

ー 研修生を受け入れるようになったきっかけは何ですか？

1991 年に農家である実家にて就農し、全国的には有機農家の研修受け入れが少しずつ増えてきているが、当時の藤沢は新規参入者がまだ少なく、青年海外協力隊の方で研修希望の直談判があったことがきっかけで受け入れることになりました（1998 年）。発展途上国では福祉以前に食糧生産の確保が先だと感じ、農業を身に付けたいと思ったとのことで、私のところを訪ねてきました。どのように研修を行えばという戸惑いがあったが、「一緒に農作業するだけでよい」との言葉に後押しされ、それならできると思い受け入れたことに始まり、これまで 100 名を超える研修生を受け入れてきました。

ー これから農家になっていく研修生たちに向けて教えていることは何ですか？

研修生には、その人に合った道を早い段階で決められるように、農業で生計を立てる厳しさはあらかじめ伝えるようにしています。研修生の数が多いと、一番大切な作業に対する経験量が減ってしまいそれでも作業は進むので、ついできた気になってしまう。受け入れ農家は仕事が進んだと錯覚してしまう。実際には双方少ない人数で回せなければ経営が成り立たちません。限られた時間の中でどれだけの作業ができるのか、していかなければならないのか、を感じてもらえるように心がけています。また、今は研修前にアンケートをとったり、約束事を伝えて守ってもらうようにしています。挨拶、掃除、道具や場所の管理など、社会人として基本的なことが中心で、そういったことは、自分たちがお世話になっている人や物、畑に対する最低限の礼儀だと私は考えているからです。受け入れる以上は、お互いがお互いの権利を守りつつ責任を果たすことが大事だと思っています。就農は決して自分のためだけではなく、農地を守る上でも後に続く人たちのための就農でもあるという話も常々しています。

ー 今後の課題について教えて下さい

今後家族経営という形での農家は減ってくると思うが、アカデミーの卒業生も増えてきて、新規参入の人も農業者としての市民権を得始めてきている。農業を新規でやる人はますます増えるのではと感じています。けれどもそういった人たちの作業場や住居の確保はまだまだ厳しい現状があると感じている。今は研修生が独立した後、どのようにつながりを保つかが課題です。地域にどのように根ざしていくかという生活面、農業そのものに対する技術面など気になることは尽きません。自分は小規模で地域に根差した農家を目指しています。国は大規模農業に目が向いているように感じるが、有機農業と一言で言っても、資材重視の慣行寄りから生き方重視の自然寄りまで解釈が広く、有機農業推進法により定義は定められているものの、解釈の幅が広いと感じています。そのため、自分自身は、消費者の方に正しく理解してもらえるよう、有機農業という言い方は慎重に使っていながら自分の農業への向き合い方を伝えられればと思っています。生産者も消費者も関係なく自分の言葉で農業を語れるようになることを目指しています。

独立就農までの流れ

新規就農希望者

藤沢市農業水産課に相談

就農資格有

就農資格無

就農資格の取得

①かながわ農業アカデミーや農業大学校を卒業
②先進農家等のもとで研修を行う
③農業法人で３年以上勤務
※要件については事前に農業水産課へ相談ください

就農する農地を探す

営農計画書面談会

３～５年間の営農計画書を作成していただき、市長、JA さがみ、農業委員会等により構成された面談会に提出された営農計画書を基に審査します。

就農予定地区の農業委員による審査

就農希望者がその地域の農業者になることを、地域の農業委員が就農予定農地との適性も含め審査します。

農業委員会の総会にて最終的な決定がされ、農地を利用できるようになります！

描いてみよう!マイ農園プラン

MEMO

目指す農ある暮らし

（例）専業農家・半農半X

大切にしたいこと

何を作る？

どんな人に食べてほしい？

どんな農法？

何を幾らでどの位販売する？

どこで学ぶ？

月収は？

終わりに

本冊子をお手に取って頂き、誠にありがとうございます。
NPO農スクール代表の小島希世子と申します。本業は藤沢市の野菜農家です。
農家といっても自給自足・家庭菜園の延長に近いスタイルで、春は、二十日大根・人参・夏野菜(トマト・ズッキーニ・なす…)、冬は、ほうれん草・コマツナなど、自分が食べるものを中心に年間30種類ほどの野菜を作っています。(農法は雑草昆虫農法。)
また、野菜作りが初めてという市民の方々や本格的に農業を仕事にすることを目指している方々に野菜作り講習会や農起業に向けた講座を行っています。

思い返せば、1人で、生まれ故郷の熊本県から遠く離れた神奈川県という地で、野菜作りを始めたのは10年以上前のこと。
今でも思い通りにいかないことだらけの毎日ですが、野菜作りを始めた頃のことを思い出すと、もっともっと思い通りにいかないことばかりでした。
野菜の栽培が上手くいかなかったり、自分の理想の農園が実現できるのか不安でいっぱいになったり、農業という仕事でやっていけるのか考え出すと眠れない日々を経験したり…。
だけど、いいこともたくさんありました。

- 自分の手で種まきから収穫まで「作る」という行為自体が楽しいし、達成感がある。
- 辛いこと、嫌なことがあっても、全力で畑で土に向かっていると、不思議と忘れられる。
- 身体を動かすので、ちょっとした運動にもなるし、筋トレにもなる。
- 青空、風、虫や雑草など、自然や生き物に触れられて、元気になる。
- うまくいってもいかなくても、自分が作った野菜は何となくおいしい。
- 農業を通じて人との縁ができる。

喜びに心がおどる日も、無力さを感じる時も、いつだって畑は私を受け入れてくれます。
種をまき、あせらず見守っていると、どんなに小さな種でも、「芽」という命が、ひょっこり土の中から頭を見せてくれます。
そんなに難しいことは考えず、この1冊を手に、農業の世界へ一歩踏み出してもらえると嬉しいです。

発行元

特定非営利活動法人　農スクール

働きづらさを抱えた方と人手不足の農業界をつなぐ取り組みを行う団体です。
具体的には、農家サラリーマンを目指すための「就農プログラム」を提供し、プログラムを通じて、参加者の方の長所を発見し、農業という産業における適材適所を見つける取り組みです。2008年に、ホームレスの方や生活困窮者の方と「農を食と職に」というところからはじまり、2013年にNPO化し、現在では、引きこもりの方なども多く参加されるようになりました。これまで100名を越える方がプログラムに参加し、卒業生には、農家の正社員や農業経営者などもいます。現在、15か所の自治体・団体にもプログラムを提供しています。(※連携企業によるプログラム提供も含む。)

小島 希世子

熊本県生まれ、熊本高校、慶應義塾大学卒。
藤沢市の野菜農家。NPO農スクール理事長。

「農を食と職に」を合言葉に、働きずらさを抱える方と人手不足の農業界をつなぐ取り組みを行っている。
体験農園コトモファームで野菜作りを教えたり、農ある暮らしや半農半Xを目指す方向けの農起業講座(コトモファーム上級者コース)の構築と提供、自治体の就農支援の現場でのプログラムの提供、農キャリアトレーナー育成プログラムや農作業を活用した新入社員研修プログラム構築、農業大学校のゲスト講師などを行っている。

書籍

著書
- 「ホームレス農園」(河出書房新社,2014年)
- 「農で輝く!ホームレスや引きこもりが人生を取り戻す奇跡の農園」(河出書房新社,2019年)

発行：特定非営利活動法人農スクール

【お問い合わせ】
TEL：070-5467-4164
〒252-0822　神奈川県藤沢市葛原1100-9
Email：info@know-school.org
農スクールサイト：https://know-school.org/
農スクール寄付サイト：https://know-school.org/donation.html
〔2022年3月発行〕